

くわの怒った話

小川未明

青空文庫

あるところに、性質せいしつのちがつた兄あにと弟おとうとがありました。父親ちちおやは死ぬときに、自分じぶんの持もつている圓はたけを二人ふたりに分わけてやりしました。

兄あにはどちらかといえば、臆おく病びようで、働はたらくことのきらいな人間にんげんでありましたが、弟おとうとはどうかして自分じぶんの力ちからで働はたらいて、できるだけの仕事しごとをしたいものだ、と、日ひごろから思おもっていました。

いよいよ父親ちちおやがなくなつてしまいますと、二人ふたりは、これから自分じぶんで働はたらいて、生活せいかつをしなければならなくなりました。あるときのこと、弟おとうとは兄あにに向むかつて、

「兄にいさん、私わたしは、お父とうさんが分わけてくだすつた圓はたけを売うつて、その金かねを持もつて旅たびに出でて、なにか仕事しごとをして働はたらきたいと思おもいますが、兄にいさんはどうなさいますか。」といいました。

兄あには、黙だまつて考かんえていました。

「どうするつて、俺おれには、べつにいい考かんえがないから、当分とうぶんこうしているよりしかたがない。おまえは、かつてにするがいいが、その金かねをなくしてしまつたら、どうするつもりだ。」と、兄あにはいいました。

「兄にいさん、私わたしは、とにかく思おもつたことをやつてみます。そして、その金かねをなくしてしまつ

たらまた働いて、体をもとでに、つづくかぎりやってみます。」と、弟は答えました。

弟は、ほどなく、その自分に分けてもらった土地を売り払って、旅へ出かけてゆきました。その後に残った兄は、圃に出てくわを取って働いていましたが、もともとから働くことが好きでありませんから、たいていは怠けて家にいました。そして、困ったときは、道具などを片端から売って食べていました。

「運は寝て待て。」ということわざがあるから、きつと、そのうちにいいことがまわってくるにちがいないと、兄は信じきっていたのです。

その年も暮れ、翌年になると、不思議に運がめぐってきました。汽車がこの村を通って、停車場が近くに建つといううわさがたつと、急にあたりが景気づきました。そして、他所からもいろいろな人間がたくさんに入り込んできて、土地の価が一時にずつと上がり、兄の持っている場所は、その中でも町の目ぬきのところとなりましたので、いちばん高く売れるのでありました。

「それ見よ、俺のいわないことじゃない。なんでもあせると、弟のやつみたいに損をするものだ。昔から、運は寝て待てというから、冒險などをするものじゃない。おれの土地などは、買い人が山ほどある。こつちの価の付け放題じゃないか。」と、兄は、得意に

なつて独語ひとりごとをもらしました。

いよいよ、兄あにの持つてゐる土地とちが高たかい価ねで売うれることにきまると、兄あには、その日ひを最後さいごとして圖はたけをみました。

「ああ、いやないやなくわ仕事しごとも、今日きょうかぎりでしなくていいことになった。これから、町まちにりつばな店みせを出だして、その帳場ちやうばにすわれればいいのだ。仕事しごとはみな奉公人ほうこうにんがしてくれるし、金かねは銀行ぎんこうに預あずけておけば、利子りしに利りがついて、ますます財産ざいさんが殖ふえるというものだ。もうこんなくわなどを使うつかことはあるまい。まったく不要ふようなものだ。」と兄あにはいつて、永年ながねん自分じぶんの手てに握にぎつてきたくわを、地面じめんにたたきつけるように投げ出だしました。すると、くわは、ひっくりかえつて、さもうらめしそうな顔かおつきをして、兄あにをながめまし

た。
「なんで、そんないやな顔かおをして、俺おれをにらむんだい。もうおまえの世話せわになどなりはしない。俺おれは明日あすから旦那だんなさまだ。おまえは、俺おれを見みたくつても、いままでのように容易よういに見みられはしないのだぞ。」と、兄あにはあざわらつて、くわをののしりました。

それから、幾日いくにちかたつてから、兄あには、町まちにりつばな商しょう店てんを出だしました。そして、その帳場ちやうばにすわつて、多くの奉公人ほうこうにんを使うつか身分みぶんとなりました。

彼は、まったくの幸福者となつたのであります。ある日、帳場にすわつて、兄は、煙草をふかしながら、外の往来をぼんやりとながめていました。路の上には、重い荷を載せて停車場にゆく車がつづいていました。また、停車場からほかへ運んでゆく車などで、終日織るがように見られたのであります。

そのとき、ふと、彼は、いましも重い荷を車に付けて、店の前を通つて停車場へゆきつつある、弟の姿を認めたのであります。

「弟じゃないか。弟のやつめ車引になつてしまいやがつた。あんな大きな口をきいていたが、あのざまはなんということだ。それにしても、俺がこんないま、金持ちになつて、ここに店を出していることを、知らぬはずはないだろう。いや、まだ知らないのかしらん。」と、兄は独語をもらしましたが、弟の耳に聞こえるように、大きなせきばらいをいたしました。

下を向いて、重い荷物を車に付けて引いていました弟は、こちらを振り向きしました。そして兄と顔を合わせますと、車のかじ棒を地に下ろして、店先へやつてきました。

「兄さん、しばらくでございます。」と、弟はいつて、頭を下げました。

「おまえは、なんというようすをしている。あのとき俺のように、じつとしておちついて

いたなら、おまえもいまごろ金持ちになつてゐるものを、いまとなつてはとりかえしがつかないじゃないか。」と、兄は、さげすんだ調子でいいました。

「兄さん、なにが幸福になり、なにが不幸福になるか、わかつたものでありません。あれから私は、事業を起して失敗しました。いまは、自分の腕ひとつを頼りに生活をしていますが、そのほうが、どれほど安心であるかしれません。」と、弟は、すこしも兄の金持ちになつたのを、うらやむようすもなく答えました。

「なにをばかなことをいうのだ。そんな生活で、おまえはいいと思うのか。」と、兄は笑いました。

「兄さん、どうぞ私のことはかまわんでください。そして、あなたは幸福に暮らしてください。」といつて、弟は、暇を告げて、また重い車を引いてゆきました。

兄は、弟の姿を見送つて、「どこまで、あいつは、負け惜しみが強いのか?」といつて、笑つたのであります。

兄は、それから、毎日愉快に遊ぶことばかり考へて、おもしろい日を送つていました。しかるに、不意に、思いがけない災難に出あいました。それは、兄が金を預けておいた銀行がつぶれて、みんな金をなくしてしまつたことであります。

ほんとうに兄は、夢かとはかり驚きました。たちまち、昔にまさる貧乏なものとならなければならなくなりました。

「なにが幸福になり、なにが不幸福になるか、わかるものでありません。」といった弟の言葉が、いまさら兄の頭の中に浮かんできました。

ある日、兄が思案に沈んで、外をながめていますと、弟が、いつものように重い荷を車に積んで通りかかりました。兄は、いいところへ弟がきたと思つて、さっそく弟を呼び入れました。そして、事の次第を弟に語つたのであります。

「いま、おまえのいったことがよくわかつた。おれも自分の力で働く気が起こつた。どうか俺を助けてくれ。」と、弟に頼みました。

このとき、弟は、じつと兄の顔を見つめていました。そして、いいました。

「兄さん、そう、あなたがお考えになつたら、だれにも頼らずに、一人で自分の力でできる仕事をやりなさい。」と、冷ややかにいいました。

「俺は、おまえのように車が引けるだろうか。」と、兄は、おどおどしながら弟に問いました。

「そこに、私の引いてきた車がありますから、ひとつ引いてごらんなさい。」と、弟は、

厳かにいいました。

兄は、重い荷物の積んである車を引いてみました。けれど、ちつとも動きません。

「これはだめだ。とても俺には引けない。」と、兄は両腕の痛むのをさすりながら、いいました。

「兄さん、あなたは昔、くわをお持ちになったのですから、そういう仕事を私が探してきます。」と、弟はいつて、その日は立ち去りました。

その後で、兄は、物置き小舎にゆきました。そして、まったく忘れていた、昔、地面にたたきつけたくわを、うす暗い中から採り出しました。

「ああ、ここにあつた。明日からこれを持って働こう。」と兄は、くわに、あらためて手をかけようとしますと、くわは、ものすごい白目で兄をにらみました。兄は、当時、くわをののしつていったことを思い出しました。

「ああ、自分が悪かった。みんな考えていたことがまちがっていたのだ。」と、心の中でわびて、くわに手をかけて、それを振り上げようとしたが、
「ばかにするな。」と、くわはいつて持ち上がりませんでした。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 二 講談社

1976（昭和51）年11月10日第1刷

1977（昭和52）年C第3刷

※表題は底本では、「くわの怒《おこ》」った話《はなし》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：江村秀之

2013年9月23日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

くわの怒った話

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>